

2021年9月12日 礼拝説教要旨

詩編講解説教77「あなたは大水の中に」

詩編77：12～21、Iペトロ3：18～20

詩編第77編は「個人の嘆きの歌」に分類されます。この詩人が具体的にどのような苦難にあったのかは分かりません。ただこの詩が作られた年代としては捕囚期から帰還後の時代と考えられますので、やはりそれは亡国の悲しみであり、廃墟と化した街を見て悲嘆に暮れる様子と理解してよいでしょう。その嘆きが次のような問いになって表れています。「主はとこしえに突き放し、再び喜び迎えてはくださらないのか。主の慈しみは永遠に失われたのであろうか。約束は代々に断たれてしまったのであろうか。神は憐れみを忘れ、怒って、同情を閉ざされたのであろうか」（8～10節）人生に起こる試練、逆境に際して、このような問いかけがしばしばなされます。神さまが生きておられるなら、なぜこのようなことが起こるのか。慈愛の神さま、憐れみの神さまはどこに行ってしまうのか。繰り返される災害、疫病、理不尽な事故等々。昨日は2001年9月11日にアメリカで起きた同時多発テロから20年でしたが、あのような惨劇を目の当たりにする時に、本当に神さまはおられるのかと問わざるを得なくなる。これはわたしたち信仰者の実存に関わる切実な問いであります。

けれども、この詩編はそういう問いかけに直接は答えていません。それよりもむしろ神さまの御業を思い起こすこと、それを物語ることに集中しています。そういう中で、この詩人の心の中に変化が生じてくる。はじめ苦難の中で神さまに突き放されたと感じていた。その人が「神よ、あなたの聖なる道を思えば、あなたのようにすぐれた神はあるでしょうか」（14節）と神さまを讃えるようになる。葛藤の中で信仰の危機を克服していく様子がここに描かれています。詩編77編はそういう信仰者の内面の変化を表しています。

「わたしは主の御業を思い続け、いにしえに、あなたのなさった奇跡を思い続け、あなたの働きをひとつひとつ口ずさみながら、あなたの御業を思いめぐらします」（12～13）ここには「思い続け」「思いめぐらす」という言葉が続きます。最初の「思い続け」というのは七十人訳聖書ではアナムネーシス（思い起こす）という言葉が使われます。これは例えば最後の晩餐で主イエスが「わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われる。この「記念する」と訳された言葉と同じ言葉です。記念するとは、その出来事を思うことによって、その出来事が立ち上がり、現在化する。神さまの救いが他人事ではなく、自分の出来事になるということです。その一つの表れが、前半部分で詩人は神さまのことを主に「神」と三人称で語っていたのに対して、後半部分では「あなた」と二人称に変化しています。細かいですが、こういうところが詩編ではとても重要です。そのように神さまとの関係が、第三者的なものではなく、「あなたとわたし」というより緊密なものになる。それはむしろ神さまが遠い存在ではなく近づいてくるということでしょう。思い起こすことで神さまが近づくのです。

では、詩人はここで何を思い起こしているのか。17節以下に記されていることは、イスラエルの人々が親しんできた故事、出エジプトの出来事です。「大水」が繰り返されますが、20節に「海」とあるように、あの葦の海を渡る奇跡がここに表現されています。エジプトから逃れてきたイスラエルの人々の目の前に海が立ちはだかります。完全に行き詰まった状態です。また「大水」は、創世記の天地創造にある「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」（1：2）という御言葉を彷彿させます。つまり深淵、混沌の状態です。

しかし、神さまはそこに道を開いてくださった。「あなたの道は海の中にあり、あなたの通られる道は大水の中にある」(20節) イスラエルの人々はその水の中の道を通して救われました。詩人はこの出来事を思い起こしています。イスラエルにとっては自分たちの信仰の原点のような出来事です。これを思い起こすことによって、不信が信頼へと変わる。自分の中だけで思い巡らしていた時は堂々巡りであり、不信が募るだけだったかもしれない。しかし神さまの救いの御業を思い起こすことによって、この詩人は自己から解放され、神さまへの信頼を取り戻していきました。

わたしたちキリスト者にとって、思い起こすべき神さまの救いの御業は何でしょうか。それは他でもないイエス・キリストの救いです。イエス・キリストはまさにこの「大水」に示されるような、混沌とした罪の世に入ってきてくださり、そこに救いの道を開いてくださいました。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとにいくことができない」(ヨハネ14:6) そのように主イエスご自身が大水の中の道となって救いへ導いてくださいました。十字架とよみがえりの御業によって、わたしたちは神の子として迎え入れられるのです。このことを絶えず思い起こす必要があります。

そしてその救いを絶えず思い起こす場所を神さまは備えてくださいました。それが礼拝です。わたしたちが説教を通して御言葉に聞くこと、洗礼を受けること、聖餐に与ること、それらはすべてキリストの救いの出来事を思い起こすためです。今日はペトロの手紙を読みました。そこではノアの物語とキリストの救いが重ね合わされています。それこそ「大水」の中を通してノアの家族が救われたように、わたしたちもまた洗礼によってキリストの十字架の贖いとよみがえりの命にあずかり、神さまのもとに導かれるのです。そのためにイエス・キリストはこの混沌とした世界に、大水の中に入ってきてくださり、自ら救いの道とされました。わたしたちは礼拝においてそのことを思い起こします。

内村鑑三は、若い日に自分の罪の問題に苦しみました。留学先のアメリカの大学で学長からこう言われたそうです。「君は君のうちを見るからいけない。君は君の外を見なければいけない。なぜ己に省みることを止めて十字架の上に君の罪を贖い給いしイエスを仰ぎ見ないのか」と。なぜ君の外にあるキリストを見ないのか。そこではキリストが君のために十字架におかかりになられたではないか。そこに内村の真の回心があったと言われます。自分を内側を見ても何の解決にもならない。むしろその眼差しを神さまへと向けていく。自分が何ができるかではない。神さまが自分に何をしてくださったのか。それを思い起こすこと、ここに信仰の危機を克服する道があります。